

令和 元年 5月 13日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13576

研究課題名(和文)台湾での授業実践を伴ったアジア型グローバル教育の授業開発研究

研究課題名(英文)Lesson development study of Asian global education with class practices in Taiwan

研究代表者

小川 佳万(Ogawa, Yoshikazu)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：90284223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル化に伴いアジアは、アメリカ、ヨーロッパに次ぐ世界の重要なネットワーク地域になりつつある。アジアは共通の言語を持たず、文化・歴史的背景も異なり独自性が高いが、それでも他地域とは異なる緩やかな共通性や連帯を見出すことが可能である。こうした点を考慮して授業内容(テーマ)の設定に当たっては、アジア諸国における「多様性」と「共通性」に着目して知識・情報になる内容を選定した。その結果、「建国神話」、「言語文化」、「価値観」、「人材育成」、「食糧問題」、「環境問題」という6つのテーマを導出し、テーマごと5回の授業を実施する全30回の授業コンテンツを完成することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル教育や国際理解教育の重要性は認識されているものの、その内容・方法は各学校及び各教員に委ねられており、またその実践は概ね断片的であり、系統性という点からカリキュラムの未整備状態にあると指摘されている。本研究はこの傾向に対処するため、つまり系統性のある授業実践を行うためにはどのようなコンテンツが相応しいかを考えようとするものである。仮に一回限りであるなら、例えば海外の姉妹校との交流を企画することも考えられる。ところが授業の系統性を考慮すれば、学習者に教えるべき個々の内容を具体的に、順を追って提供することが必要である。したがって本研究はグローバル教育授業の提案型研究として位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：With the process of globalization, Asia has becoming an important network area of the world followed by the United States and Europe. Although Asia has different cultural and historical backgrounds, it is still possible to find loose commonality and solidarity that is different from other regions. Considering these points, I focused on 'diversities' and 'commonalities' in Asian countries and developed session contents (themes) for students to be able to acquire concrete knowledge and information. As a result, I derived the six themes of 'Founding Myth', 'Language and Culture', 'Values', 'Human Resource Development', 'Food Issues' and 'Environmental Issues.' Preparing five sessions for each theme, I was able to configure totally thirty session contents.

研究分野：比較国際教育学

キーワード：グローバル教育 アジア型 国際理解教育 授業実践

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年のグローバル人材育成の取り組みは一部の国に限られたものではなく、その重要性については実施有無に関係なく世界各国が共通認識を有している。そして、そのための教育の内容と方法も、一定の共通分母を共有しながら、自国の固有な事情を反映した多様な取り組みがなされている。日本においてもグローバル化への対応として、各教育段階でさまざまな取り組みがなされてきている。国の政策との関係で言えば、「トビタテ留学 JAPAN」のように高校生や大学生個人を支援対象として積極的に海外に送り出す取り組みがある。また「スーパーグローバルハイスクール (SGH)」のように特定の高校を選定して関連活動を促すものがあるが、すべての高校生に日常的に影響を与えるものとしては、「国際理解教育」を挙げることができるであろう。これは主に「総合的な学習の時間」を利用して実施されるが、そこでは学習課題が「情報」や「環境」などと並んだ1つの柱として「国際」理解教育が強調されている。ただし、積極的に国際理解教育を実践している高校も一部でみられるものの、概して言えば、それほど熱心に取り組んでいるとはいえない状況にある。「学習指導要領」で内容が定められた教科と異なり、グローバル人材育成の重要性は認識されているものの、その内容・方法は各学校及び各教員に委ねられているからである。そのため実践は概ね断片的であり、系統性という点からカリキュラムの未整備状態にあると指摘されている。

### 2. 研究の目的

本研究は、この傾向に対処するため、つまり系統性のある授業実践を行うためにはどのようなコンテンツが相応しいかを考えようとするものである。仮に一回限りであるなら、例えば留学生に自国の状況を話してもらったり、海外の姉妹校との交流を企画したりすることも考えられる。ところが一定期間にわたる授業の系統性を考慮すれば、学習者に教えるべき個々の内容を具体的に、順を追って提供することが必要である。したがって本研究はグローバル教育授業の提案型研究として位置づけられる。

### 3. 研究の方法

本研究の特徴の一つは、その内容をアジアでの相互理解を促進するものという限定を設けたことである。周知のとおり、東アジアは古代より歴史的な繋がりが強く、地理的な意味においても、政治・経済的な意味においてもお互い重要なパートナーである。ただし、近年の関係が示すとおり、必ずしも友好関係が維持されているとはいえず、お互い一層の努力が必要だという認識では一致するであろう。そこで、高校生がアジア理解を深めるにはどのような内容にしたらよいかについて探索的に明らかにしようとするものである。

特徴の二つ目は、研究者のみならず、国際理解教育やグローバル教育の分野で実践を重ねてきた現職教員、さらには日本の学生や中国・韓国の留学生を加えて共同で授業案の開発を行ったことである。特に高校教員の「実践現場の視点」から、留学生の「外側の視点」から、さらに学部生の「高校生に近い」視点からそれぞれのコンテンツについて検討してもらったことは大変有益なものとなった。

特徴の三つ目は、作成したコンテンツをもとに日本や台湾の高校で実践を重ねることによって、コンテンツの修正を図ってきたことである。アジア地域には多様な価値観が存在し、そのなかでグローバル教育が活発な国(地域)がある。本研究ではこの見地から先進的事例を持つ地域として台湾を選定した。台湾は歴史的、地理的、あるいは現在の国際的に微妙な立場を反映して外国との交流が盛んであり、教育面でもグローバル化に積極的に対応している。実際に何度も台湾の高校で授業を実践する機会を与えていただき、生徒たちの反応や教師からのコメ

ントが何物にも代えがたい我々の研究推進力となったことを記しておきたい。現地での実践を経験してみて、授業案や方法論等のノウハウを大学内、また日本国内に限定せずに実践に基づく共同体制で授業を練り上げることにより、新たな質保証が可能となることが実感できたからである。

#### 4. 研究成果

##### (1) 知識の理解

グローバル化に伴いアジアは、アメリカ、ヨーロッパに次ぐ世界の重要なネットワーク地域になりつつある。アジアは共通の言語を持たず、文化・歴史的背景も異なり独自性が高いが、それでも他地域とは異なる緩やかな共通性や連帯を見出すことが可能である。授業内容(テーマ)の設定に当たっては、アジア諸国における「多様性」と「共通性」に着目して知識・情報になる内容を選定した。その結果、【表】で示すように「建国神話」、「言語文化」、「価値観」、「人材育成」、「食糧問題」、「環境問題」という6つのテーマを導出し、テーマごと5回の授業を実施する全30回の授業コンテンツを構成することができた。

【表】「アジア型グローバル教育」授業テーマ

領域	授業テーマ
1	アジア諸国の建国神話
2	アジアの言語文化
3	アジア人の宗教・価値観
4	アジアの人材育成
5	アジアの食糧問題
6	アジアの環境問題

##### アジアの歴史と固有文化の理解

先ず、学習者がアジア諸国の「多様性」に関心をもち理解を深められるよう、歴史と固有の文化領域から身近に感じることのできる3つの授業テーマを設定した。「建国神話」と「言語文化」、「価値観」がそれに相当する。

具体的に言えば、1つ目は歴史の領域から「建国神話」を導出して、4ヶ国(日本、韓国、中国、シンガポール)の建国神話を中心にそれにまつわる独自の風習や生活習慣、特徴の理解をはかる。全体の授業構成のなかで最初の段階に当たるここで「建国神話」を取り上げる理由は、アジア諸国の固有性を理解するときその文化の基盤になるもの、また人々の精神の根底におかれるものとして「建国神話」が非常に有効性をもつと考えるからである。それが真実かどうか、あるいは科学的かどうか、という点では問題を抱えていることは確かであるが、神話成立当時のその国民がどのような意識であったのかを少しでも理解しようとすることは重要である。さらに、学習者にとって今後の学習動機や関心が持てるよう、理解が容易で軽くアクセスできるものにしたいという意図もあった。

次に、固有文化の領域として「言語文化」、「価値観」を選択した。2つ目のテーマである「言語文化」の授業では母国語(固有な文字や独特な表現など)や言語環境、また国際語としての英語の普及様相やその背景などに触れる。また3つ目の「宗教・価値観」では、各国の宗教事情や日常生活への影響、あるいは伝統的な家族観とその特徴、今日の変容などを扱う。この段階では伝統的な価値観の源流として神道や仏教、儒教、道教などに由来する哲学や学問なども

題材として提示する。

#### アジアの制度と社会問題

次は、アジア諸国の制度と社会問題の領域から設定した授業テーマについてである。これも「人材育成」と「食糧問題」、「環境問題」という3つのテーマに分けられる。

1つ目の「人材育成」は教育制度に関する内容である。基本的な教育制度の体系や特徴、国際化の動向とグローバル人材育成とその背景などを紹介する。「制度」という多少難しく考えがちなテーマを「教育」制度にすることで、高校生の関心と共感が得られるよう配慮したものである。

2つ目と3つ目のテーマでは社会的課題の領域から「食糧問題」と「環境問題」といった地球規模の課題（グローバルイシュー）を題材とする。「食糧問題」の授業では、各国の食文化に関する基本的な知識・情報とともに、各国が抱える食をめぐる課題を提示する。「食の安全問題」（中国）と「食糧安保問題」（韓国）「食料廃棄問題」（シンガポール）「食糧の輸出入問題」（日本）などがその内容となる。また「環境問題」の授業では、「環境汚染・自然災害問題」（中国）「エネルギー問題」（韓国）「水質汚染・大気汚染」（シンガポール）「防災意識」（日本）のような各国の個別課題でありながら共通課題でもある内容で構成する。この2つのテーマは小学校と中学校の教育課程で学習した内容ともつながりをもつものでもある。

#### 「多様性」と「共通性」の比較

1つ目のテーマである「建国神話」の授業では各国の異なる事情からアジアの多様性を理解することが期待できる。次の「言語文化」のテーマでは母国語と英語の2つの言語を題材にするが、これは多様性とともに共通性の理解をはかるものである。諸国の母国語に関する知識・情報を通して言語文化の差異を理解し、英語の学習及び影響に関する題材からは自ら自国の実情と比較して共通点と相違点を抽出し、理解の程度を深めることができる。これは3つ目のテーマ「価値観」でも同様のことがいえる。授業の前半では各々の伝統的な宗教・価値観を紹介し、後半では「少子高齢化」を背景にする今日の変容を考えてもらう。それによって、多様性を理解した上で、共通性の有無に関する議論ができ、前半の授業に対する理解も深まると考える。このように、歴史と固有の文化領域から選定した授業テーマは、基本的には各国の多様性にやや重点をおくものにして、段階的に共通性を見出せる題材を用いる。

一方、制度と社会問題の領域のテーマでは、全般的に共通性が目立つなか、多少の多様性を確認するものにする。特に後半の地球規模の課題では4ヶ国のそれぞれの事情を紹介するが、その内容はアジアの課題でありながらまた世界が抱える課題でもあることを理解するようにして、共通性の範囲をさらに拡大して認識することができる。

近隣諸国とは言え、一般の高校生が日常的に海外のことを知ることはあまりない。断片的に入ってくる海外のニュースは、断片的であるがゆえに誇張されやすく、歪曲されやすい。そこで、本論文の試みでは知識の理解をはかる授業内容の設定において、アジア諸国の多様性から共通性へと段階的な理解を目指す。また授業方法においては相互比較することによって習得した知識・情報のさらなる深化をはかる。

## (2) コミュニケーション能力

グローバル人材に必要とされる能力・資質のなかでコミュニケーション能力の概念に関する解釈は大きく2つに分けることができる。コミュニケーション能力のキーワードを広義に捉えると、その概念は「外国語などの語学力のみならず、異文化理解を通して異質な相手と柔軟に協調して、与えられた問題を解決できる能力」などと解釈できる。一方、狭義に解釈すると、

コミュニケーション能力は「語学力や外国語能力」となり、英語教育に重点がおかれる。他方、コミュニケーションによる「新しい価値」形成に注目する見解もある。それによれば、コミュニケーション能力は「自分の意見だけを通すのではなく、自分の意見と相手の異見の双方を論理的・客観的に比較検討すること。相手の意見に共感できる点があれば、自分の意見を積極的に修正していくこと。双方向のコミュニケーションのなかで、これらを行いながら、「新しい価値」を作り上げること」とされる。

本論文の試みでは、授業方法において上述の広義のコミュニケーション能力と「新しい価値」を生むコミュニケーションの機能に注目する。コミュニケーション能力の育成を英語などの外国語教育に限定せず、グローバル人材の資質・能力の3つの要素を横断的・総合的に学習することが必要だと考えるからである。またその過程では授業方法として積極的なコミュニケーションを誘導する。つまり、30回の全授業において知識・情報を習得する過程で積極的な発問とグループワークを取り入れる。

本授業コンテンツのテーマごとの下位授業では、問題意識を認識するための導入の発問の後、本格的な知識・情報を習得して（インプット）それらを確認する中間発問、全体授業内容の統合・振り返り（まとめ）の後にまとめの発問（当事者意識、発信）をするという構成からなる。各発問の後にはグループでの話し合いを実施する。また必要に応じては知識の理解と深化（共感）などをはかる個別の質問を随所に取り入れることもできる。このような段階的な発問とそれに伴うグループワークは、他者を理解して良好な関係をつくり、ともに新しい価値をつくる統合的なスキルとしてのコミュニケーション能力をはかるものである。

### （3）態度・姿勢

以上ではグローバル人材の資質・能力のなかで「知識の理解」と「コミュニケーション能力」の領域について検討してきた。前者はグローバルな社会を生きていく当たり必要となる知識の理解及び深化をはかる領域で、後者は積極的に他者と関わって新しい価値を作る統合的なスキルの涵養を目指す領域であった。前者が理性に依拠するものであれば、後者は感性に訴えるものともいえよう。そして、次の3つ目の資質・能力は、理性と感性を併せ持ち、それらを行動に移す「態度・姿勢」の領域である。知識とコミュニケーション能力があるとしても、それを実践しないのであれば、完全な能力・資質を涵養したとはいえず、「態度・姿勢」の育成こそがグローバル人材育成のゴールであるといっても過言ではないだろう。

「態度・姿勢」領域のキーワードには「自律（主体性）」、「アイデンティティー」、「学びへの力・人間性」、「チャレンジ精神」、「責任感・使命感」があり、多様な語が並ぶが、核心概念になるのは「主体性」であると考えられる。そこで、本論文の試みではグローバルな社会で起きる諸現象に主体的に、すなわち当事者意識をもって実践する人材の育成を目指す。そのために各授業テーマにおいて、1)諸国の事情に共感を得て、2)自分または自国のこととして認識し（当事者意識）、3)実践するという仕組みを試みた。

このように、同じテーマを用いた自国と他国の事情を内容とし、また近隣国間の関わりに主眼をおく授業構成によって、学習者の自国と他国の理解はもちろん、互いが抱える課題に対する当事者意識を形成することができる。そして、これはグローバル社会での共生を目指す主体的な態度及び実践動機を付与することにつながると考える。このような授業の内容と方法の設定は、アジア諸国だけでなく、範囲を広げて世界各国の対象にする際にも有効であると考えられる。

〔雑誌論文〕(計5件)

小川佳万・姜姫銀「グローバル人材育成のためのコンテンツ開発 高校生のアジア理解」  
『学校教育実践研究』第25巻、査読無、2019年、139-146頁。

DOI:10.15027/47515

小野寺香・小川佳万「中国の高級中学における「総合実践活動」の特徴 日本の「特別活動」と「総合的な学習の時間」との比較を通して」『教育システム研究』第13巻、査読無、2018年、339-350頁。

[http://www.nara-wu.ac.jp/crades/journal/journal\\_13.pdf](http://www.nara-wu.ac.jp/crades/journal/journal_13.pdf)

小川佳万「世界の中の国際理解教育」『国際教育』第23巻、査読無、2017年、80-83頁。

DOI:10.24751/jies.23.0\_80

姜姫銀・小川佳万「韓国的高等学校における中国理解教育 中国語科目の「文化教育」に焦点を当てて」『中国研究論叢』第17巻、査読無、2017年、5-23頁。

小川佳万・姜姫銀「韓国における「多文化教育」支援に関する一考察」『学校教育実践学研究』第23巻、査読無、2017年、139-145頁。

DOI:10.15027/42783

〔学会発表〕(計2件)

小川佳万「日本高中生 - 日本文化与高中文化 - (日本の高校生 - 日本文化と高校文化 - )」、  
亜州共同体教育系列講座 (Educational Tasks for the Formation of Asian Community)  
2019年、中国・瀋陽師範大学 (招待講演)

小川佳万「關於日本高中的思考 (日本の高校教育)」、  
亜州共同体教育系列講座  
(Educational Tasks for the Formation of Asian Community) 2017年、中国・東北大学 (招待講演)

〔図書〕(計1件)

小川佳万 (編)『台湾での授業実践を伴ったアジア型グローバル教育の授業開発研究』、  
広島大学大学院教育学研究科、2019年、全176頁。

## 6. 研究組織

### 研究協力者

研究協力者氏名：小野寺 香

ローマ字氏名：ONODERA, Kaori

研究協力者氏名：石森 広美

ローマ字氏名：ISHIMORI, Hiromi

研究協力者氏名：姜 姫銀

ローマ字氏名：KANG, Heeun

研究協力者氏名：李 佳琦

ローマ字氏名：LI, Jiaqi

研究協力者氏名：石井 佳奈子

ローマ字氏名：ISHII, Kanako